

11月紙上例会

幕末品川陸台場（オカダイバ）物語

岸本昌良（会員）



(01) 御殿山 江戸時代 桜の名所 北品川4-7周辺
 (『新編武蔵風土記稿卷之五十六』)

歩行新宿大横町の西にあり。廣さ三町八段五畝二十九歩、今御林となり、桜樹多し、有徳院殿和州吉野山の種を移し植えらし所なりと。文政九年にも命ありて數株を植え添え、春毎に看賞の客多し、其の頃北品川歩行新宿よりも願上にて桜楓松千株を植添えしと云。

享保六年二月山上に制札を建て、遊人の狼藉を禁ぜらる。林中御立場あり、廻二十六間半、高六尺、御遊毎に御腰を掛けさせ給ふ相傳ふ此所長祿の頃太田道灌の館あり。文明年中連歌師心敬僧都と道灌千句の連歌を催す



(東都名所 御殿山花見之図 初代広重)

(02) 土取場跡 御殿山庭園 (御殿山ヒルズ付属公園)

御殿山ヒルズ脇の公園は窪地になっています。この窪



地は明治の地図にも掲載され、御台場建設のため土を採取し、窪地となったためと推測できる



(御殿山公使館地図『江戸の外国公使館』より)

(03) 御台場建設 (『国史大辞典』)

嘉永六年(1853)八月から翌安政元年(1854)五月までに、江戸品川浦沖に建設された六基の砲台。この台場は嘉永六年六月、ペリー提督の率いるアメリカ艦隊が突如来航したのを機に、江戸幕府がにわかに海防策の一環として品川浦沖に11基の台場を構築するという案を採択して建造されたもの。これは伊豆蕪山代官江川太郎左衛門の献策によったが、幕閣内部に激しい反論があったに

もかかわらず、幕府は緊急非常事態に備えて、あえて決行した。総工費約 75 万両をかけて翌年五月までに第一・二・三・五・六番台場を完成させたが、第四台場（通称くずれ・緒明台場）は構築半ばにして資金難のために中止した。規模からいっても、完成した五基の総坪数は四万七千六百七十坪（約一六ヘクタール）。しかも海岸から二・四キロも離れた海中にわずか十ヶ月の短期間に完成した驚異的な工事であった。（中略）埋立て用の土砂約 34 万坪は品川御殿山の一角を切り崩して海に運び、土方人足だけでも二百七十万人が動員された。また石垣用として伊豆・真鶴・三浦の石を採石し、輸送船には伊豆・房総半島諸港の地船が徴用され、周辺地区の人々や道路は大混乱となった。台場の建設方法は間隔建壁リニー式を採用し、形状は五稜形、大砲約二十～三十門に火薬庫・玉薬置所・番所などの付属施設が設けられた。

（04）日本開国小史（『日本史年表』より作成）

- 嘉永 5 年（1852）6 月 オランダの『別段風説書』開国を求めるアメリカ軍艦来航計画を幕府に伝える。
- 嘉永 5 年 11 月 ペリー司令官兼遣日大使。
アメリカ出航
- 嘉永 6 年 6 月 3 日、ペリー艦隊四隻、浦賀沖に来航。
許可無く、江戸湾、浦賀湾内計測
- 嘉永 6 年 6 月 9 日、幕府、ペリー一行の久里浜上陸許可、大統領親書を受け取る
第十二代将軍徳川家慶が病気のため返書に一年の猶予を求める
- 嘉永 6 年 6 月 12 日、ペリー艦隊離日
- 嘉永 6 年 6 月 22 日、12 代徳川家慶死去。
（13 代家定）
- 嘉永 6 年 7 月 1 日、老中首座阿部正弘、
外交についての意見を求める
- 嘉永 6 年 8 月 老中阿部正弘、江川太郎左衛門らに砲撃用の台場造営を命じる
- 嘉永 7 年 1 月 ペリー来航。軍艦七隻。
神奈川沖に停泊、開国交渉
- 嘉永 7 年 3 月 日米和親条約締結（下田・箱館を開港）
- 安政 4 年 6 月 老中阿部正弘死去
- 安政 5 年 4 月、井伊直弼は大老職拜命
- 安政 5 年 6 月 19 日、井伊大老は朝廷の勅許無く、

- 日米修好通商条約締結
- 安政 5 年 6 月 24 日、徳川斉昭、松平慶永と水戸藩主・徳川慶篤、尾張藩主・徳川慶恕が江戸城に無断で登城。斉昭らは幕府の違勅調印を非難し、事態收拾のため一橋慶喜を将軍継嗣を要求
- 安政 5 年 6 月 25 日、幕府は徳川慶福（14 代家茂）将軍継嗣決定を公表
- 安政 5 年 7 月 5 日、幕府は、徳川斉昭に謹慎、徳川慶恕・松平慶永に隠居・謹慎を徳川慶喜に登城停止を命じる
- 安政 5 年 7 月 6 日、朝廷から幕府に条約調印の経緯について説明せよとの沙汰書、幕府は公務繁多を理由に老中・間部詮勝が上京。
- 安政 5 年 9 月 京都・江戸で尊攘派志士が次々に捕縛（安政の大獄）。
- 万延元年 3 月 3 日、桜田門外の変。
大老井伊、桜田門外で水戸・薩摩浪士らに斬殺
- 万延元年 12 月 米国通訳官ヒュースケン、三田で浪士に斬殺される
- 文久元年 5 月 攘夷派浪士十四名は東禅寺のイギリス公使館を襲撃
- 文久 2 年 2 月 11 日、皇女和宮と将軍家茂の婚礼。
- 文久 2 年 8 月 生麦事件。
薩摩藩主の父である島津久光が江戸から帰国の途中、生麦村で騎馬の英国人四名が行列を乱したとして、同藩士に殺傷された事件。
翌年の薩英戦争の原因となる
- 文久 2 年 8 月 品川御殿山に新英国公使館建設開始、
- 文久 2 年 12 月 英国公使館ほぼ完成
- 文久 2 年 12 月 12 日、長州藩尊攘派による、英国公使館焼打ち。

（05）御殿山の名所

- ①吉川英治旧居 北品川 4-5（国登録有形文化財）
- 昭和 14 年、碌々商会野田社長により、自邸として建築される。戦後、GHQ により接收、返還後、昭和 28 年に作家吉川英治が購入。昭和 32 年に現所有者に売却。「戦前期の住宅様式の特徴を建築当初の状態ではほぼ残す貴重

な建造物」として、平成 23 年に登録された。吉川英治はこの家に住んでいたときに代表作『新平家物語』を執筆。転居の理由は煤煙のためだという。

②翡翠原石館 品川区北品川 4-5-12

館長は会社を経営する傍ら、約 30 年かけて翡翠を収集。世界有数の産地である新潟県糸魚川の翡翠を後世に残すべく、2004 年に博物館をオープンさせた。日本唯一の翡翠専門博物館



*翡翠 (『日本考古学辞典』)

翡翠はヒスイ輝石の微細な結晶からなる鉱物で、古代中国では玉器の材料の美称、日本では硬玉の別称とすることが多い。(中略) ミャンマーが主産地だが、日本でも新潟県糸魚川市の小滝川河床の原石発見以来、同青海町橋立・富山県朝日町宮崎付近・鳥取県若桜町角谷・兵庫県大屋町加保・長崎市三重などに産地があることが判明した。最古の硬玉製品は縄文前期の諸磯C式土器に伴う山梨天神遺跡の垂玉とされている。中期には大珠を多くつくり、九州～北海道に分布し、とくに北陸・中部・関東に多い。後・晩期には、大珠は衰退し、勾玉、管玉。丸玉が多くなる。弥生時代はほぼ勾玉に限られ、この傾向は古墳時代に継続するが、古墳前期には棗玉も少なくない。古墳前期後半には勾玉の材料が多様化し、後期以降の硬玉製勾玉は激減する。7世紀後半以降の一般的な装身具の衰退とともに硬玉の使用も衰え、8世紀以降は途絶えたらしい。(中略) 硬玉製品はほとんどを北陸地方で製作したらしく、朝鮮半島にも勾玉などの硬玉製品が出土するが、日本からのもたらされた可能性が高い。

③原美術館 (閉館) 北品川 4-7-25

原美術館は、昭和 54 年に現代美術専門館の草分けとして誕生。現・公益財団法人アルカンシェール美術財団を母体に、現代美術を通じた国際交流の推進と現代美術の

活性化、アーティストの支援の場として活動。令和 3 年、建物の老朽化により閉館。



原美術館は実業家・原邦造の邸宅として昭和 13 年に誕生。設計は東京国立博物館本館(上野)や和光ビル(旧服部時計店・銀座)を手がけた渡辺仁によるもの。日本におけるモダニズム建築、あるいは昭和初期の洋風建築の貴重な例の一つとされている。

*原邦造 (『日本人名大辞典』)

大正-昭和時代の経営者。明治 16 年生まれ。原六郎の養子。満鉄勤務、大正 13 年愛国生命社長となる。東武鉄道など多くの企業の取締役をかねた。戦後は電源開発初代総裁、日本航空会長等をつとめた。昭和 33 年死去。

*渡辺仁 わたなべひとし (『日本人名大辞典』)

明治 20 年生まれ。東京帝大卒。鉄道院、勤務をへて、大正 9 年渡辺仁建築工務所をひらく。帝室博物館(現東京国立博物館)、服部時計店(現和光)、第一生命館(松本与作との共作)など多様な作品を残す。昭和 48 年死去。

(06) 御殿山出土の板碑等は法禅寺に運び込まれる 法禅寺 北品川 2-2-14

概要 (『新編武蔵風土記稿』)

明徳元年 (1390) 言訖定實創立

本尊 阿弥陀座像

(07) 法禅寺の伝説 (「法禅寺の栞」)

浄土宗開祖法然上人は治承三年 (1179) に、念仏弘通のため奥州につかわした金光坊を慰めるため、身替りに御自作の像を届けるよう阿波之介に命じられた。山城国の陰陽師であった阿波之介は、性愚鈍と言われたが、今日、私達の使用する二連珠の考案者で、熱心な念仏行者

であった。阿波之介は、奥州下向の折、品川に於て日暮れ、一夜を草庵で過し、翌早朝出立しようとしたが、像は微動だにしなかった。阿波之介は、これは、ここが念仏有縁の地ならんと思い、法然上人御直筆の六字名号とともに、その木像を草庵に安置することとした。その後、道俗の帰依するところとなり、後年言誉上人は、ここに一堂宇を建立し、「法禅寺」と公称した。

*本堂に阿波之介の座像がある

(08)「遺墳碑」(法禅寺)(非公開)

安政元年甲寅旧幕府命築砲台於品海先考昌言君乃幹其事取土於御殿山以營焉穿之数仞有古墳及遺骨若干而出閱其歲月之記皆四五百年前之物也嗚呼古之名將豪族卜兆域於此者遭海嘯或地震而淪沒也陵谷之變豈可不惑愴哉先考患其散逸以混土塊為製數筐拾収之使役夫轉藏於品駅法禅寺之後山後数年砲台亦為虛設而此墳巍然而存余亦有所深感困追記焉

明治二年己巳六月 駿州候人 大竹昌藏撰并書

下田喜成鐫



板碑等納められている小屋(法善寺境内)



板碑等とともに出土した人骨の供養塔(法善寺境内)

(09)「遺墳碑」昭和初期の様子

(服部清五郎「品川法禅寺の遺蹟其他」

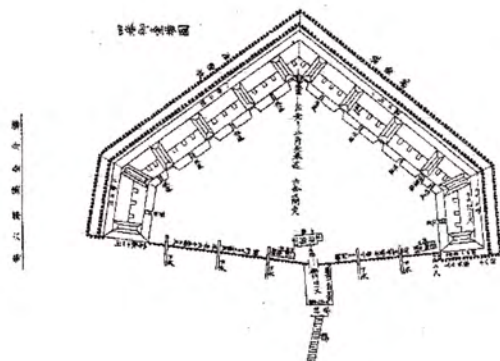
『史蹟名勝天然記念物』昭和七年)

「法禅寺遺墳の現状は高一尺、直径六七尺の土饅頭風のもので、周圍に百基近くの板碑を柵様にめぐらし、上には五輪塔や寶篋印塔を小高く積上げてある。出土遺骨は恐らくはこの下に埋葬せられてあるものであらう。然しながら右碑文中の「古墳」とは、果して何を指すのであらうか。(中略)此の碑の建立者大竹昌藏なる人は旗本の出と云はれ、其の子息は今健在して居って時折この寺を見廻られるとの事」

(10) 御殿山の土砂により構築された御台場

御殿山下砲台(陸台場) (『陸軍歴史卷十』)

嘉永7年11月13日起工、12月15日竣工。



一 惣坪
數 7386
坪餘

(11) 明治以降の御殿山下台場 (『品川台場史考』)

明治 13 年 品川高等海員養成所設置

(日本海員掖済会)

明治 25 年 暴風警報信号所設置 (中央气象台出張所)

(12) 各御台場の現在 (『品川台場史考』)

- 第一台場 昭和 38 年、品川埠頭の建設で上部構造は撤去、基礎部分は現存。
- 第二台場 昭和 36 年、東京港の開港に伴い船舶の航行の妨げとなり、完全に撤去。
- 第三台場 大正 4 年、東京市に払い下げ、現在は台場公園 (国指定史跡) として整備。
- 第四台場 昭和 14 年、未完成のまま現在の天王洲アイルに埋没。
- 第五台場 昭和 37 年、品川埠頭に取り込まれるが、基礎部分は現存。
- 第六台場 現存するが、保存状態は危機的な状況 (国指定史跡/立ち入り禁止)。
- 第七台場 昭和 40 年、未完成のまま撤去。
- 御殿山下台場 昭和 32 年、台場小学校の敷地に埋没。五角形の地形が現存。

(13) 品川宿と飯盛り女



(『品川歴史館所蔵 浮世絵図録』より)

(14) 歩行新宿 (『新編武蔵風土記稿卷之五十六』)

北品川宿三丁目の北より、八ツ山の界に至る、長五町二十間余の地、宿並をなせり (中略) 古は北品川善福寺門前法禅寺門前及新町と唱へし茶屋町にて、酒食のみを商い、品川宿及歩行人夫百人の内、年毎に此地より一万二千人の課役を勤め、次第に困窮せしを以て、享保年中本宿に加わり駅舎を置んことを願上しかば、同年十二月 (中略) 其願を許せり (中略) 民戸三百八十八、内脇本

(15) 品川宿の旅籠屋数 (『品川遊郭史考』)

天保 14 年 正月 関東取締出役調査

南品川宿	旅籠屋	40 軒	此食売女	417 人
北品川宿	旅籠屋	22 軒	此食売女	385 人
歩行新宿	旅籠屋	32 軒	此食売女	546 人
総計	家数	94 軒	人数	1348 人

(16) 飯売女=飯盛り女 (『日本国語大辞典』)

江戸時代、宿駅の旅籠屋で旅行者相手に寝食の世話をした幕府黙認の売笑婦。万治 2 年 (1659) 幕府の東海道宿駅における遊女禁止令とともに出現。初めは公認の遊女と違って衣類が華美でなく、木綿着用と規定されていたが、次第にくずれて事実上遊女化した。飯盛旅籠屋には一軒に二人を置くのが原則であるが、その多寡や有無は直接、宿駅の経済にも影響するため、法網をくぐって下女の名目で抱えた女に売色させる例も少なくなかった。

(17) 昭和初期の貸座敷業者数 (『品川遊郭史考』)

歩行新宿 32 軒、北品川宿 7 軒、南品川宿 4 軒

(18) 相州楼 (土蔵相模) (『品川遊郭史考』)

宿内にては名高き妓楼にて、只今の建物は宇津屋火事 (慶応二年) 後の仮宅なり。同家は維新元勲の壮年時代日夜遊興せられし所なり。海辺見通しの座敷は土蔵造りにして当時粋客を驚嘆せしめし座敷なり。相模屋は寛政時代に本宿橋際にあり、何時の頃の火災にや焼失して新宿へ移りしなり。

(19) 映画『幕末太陽伝』 (昭和 32 年)

監督 川島雄三 主演 フランキー堺

落語の『居残り佐平治』『芝浜』『品川心中』を基礎に品川の遊郭相州屋を舞台として、異人館焼き打ちを交えて描く喜劇。日本映画オールタイムベストテン (1995) で十位

(20) 御殿山焼討 (『伊藤博文伝 上巻』昭和15年)

米国公使館通訳官ヒュースケンが。外出より麻布善福寺への歸途、中之橋附近に於て暗殺せられ、その後ち高輪東禪寺の英国公使館激徒の襲撃を受け。館員二名負傷せし等の椿事ありしかば、幕府は、各国公使館が江戸市中の寺院又は横濱地方に散在しては警衛上不便。少からざれば、これを一箇所に集めんとの方針を以て、英、米、佛、露、蜀五国の公使館を品川御殿山に新築することとせしが、この年十二月に至り、英国公使館は既に落成し、佛国公使館は尚ほ作業中、次いで他の公使館の建築にも着手する筈であった。

御楯組の人々は、幕府が表面攘夷即行の勅諭を奉じながら、各国公使館を建築するが如き矛盾の態度に出づるを憤慨し、一挙してこれ等の公使館を焼拂はんと企てた。その一味は前記有志の外、新に公及び福原乙之進これに加はり、總勢十三人となり、決行の期を十二月十二日夜半と定め、役割は、志道、堀、福原の三人が火付係、その餘の十人が邪魔者打拂役を引受け、寺島は、長藩出入の薬種商より硝石と硫黄とを買取り、これに切炭を加へ、

直径六七寸の塊に作り、導火線を着けたる焼弾数個を製作した。

やがて当日に至り、一同これまで長藩士密會の場所たりし品川の青樓相州樓(土蔵相模)に集合し、酒宴を張って時刻を待った。その間公は思ふ所あり、密かに近慮の露店に行きて手ごろの鋸を買ひ来り、これを楼前ふ天水桶の中に隠して置いた。既にして時移りて夜半となるや、三々五々に分れ、一同御殿山に集合した。新築公使館の周囲には木柵を繞らしその外側に乾濠ありて容易に入るべからず、一同如何せんと躊躇せる時、公は先刻買求めて携へ来りし鋸を取出し、木柵一二本を挽切りて通路を開いた。一同勇躍して此慮より入込んだ。折しも番人らしき者、葵の紋の提燈を掲げ来りて誰何せしが、高杉が大刀を抜き大聲叱咤するや、忽ち倉皇として逃げ去った。

それより一同館内に踏み込み、障子、建具等を積み重ね、焼弾を配置してこれに火を点じ、燃え上るを見届けて引揚げた。

陸台場周辺図
(『東海道品川宿マップ』(品川歴史館)より作成)

